

オスマン朝統治下カイロの食糧騒動と通貨騒動

長谷部 史彦

I はじめに

II 食糧騒動と通貨騒動の諸事例

一 一七世紀末の食糧騒動

二 一七〇三年、一七一五年、一七三三年の通貨騒動

三 一七二二〜一七二五年の食糧騒動

四 一七二八年、一七三一年、一七三五年の騒動

III 運動の性格

一行動主體

二行動形態

IV おわりに

I はじめに

前近代中東の民衆による多様な異議申し立てに關する研究の意義は、當時の軍事的支配體制や統治構造、或いは政治文化の動態的把握への寄與にとどまらない。近代以降の諸革命の持つ複合的性格が詳論され、その「革命性」が再吟味されつつある現狀に於て、それは、兩者を同一平面上に据えて論じるための基礎的作業といった意味合いをも帯びているのである。

本試論の主眼は、オスマン朝統治下カイロの民衆運動について、革命に至らぬ、或いは革命の可能性をいくらか秘めていたかに見える大小の異議申し立ての諸事例をさらに具體的に確認し、特に民衆の行動形態に焦點を絞り、それらの性格を再検討することにある。この時代の民衆運動は、不満の源泉、鬭争の形態や目標、運動を支える意識、或いは「指導エリート」の存在や性格などに於て、前代のマムルーク朝統治下の運動に較べ著しい多様性を示しており、運動の基盤をなす社會的結合關係に關しても、イスラーム神祕主義敎團への歸屬や地縁的な絆が重要な場合が見られる。⁽¹⁾ 以下ではこれらのうち、食糧や生活必需品の價格騰貴、或いは通貨制度の混亂や通貨換算率の變動に直面した都市民衆による經濟的な不満の表明を中軸とした騒動に考察對象を限定し、論を展開していくことにしたい。ここでは假に前者の事態に際しての民衆運動を食糧騒動、後者のそれを通貨騒動と呼ぶこととする。A・レモンも指摘したように、こうした運動の事例は、史料には通貨危機・經濟危機の時期である一七世紀末～一七三〇年代に集中的に現れている。⁽²⁾

以下に於て頻繁に依據した史料は、オスマン朝エジプト總督(Vali Mîr)の統治期ごとに分けて時系列的に記述されたアラビア語年代記であり、とりわけ當該の主題に關して最も重要な同時代史料である *Zubda' Tuhfa' Awḍāḥ* の三つの年代記である。⁽³⁾ 本稿ではマムルーク朝時代の騒動との比較分析を可能な限り行なうことにより、オスマン朝時代の騒動の特質を抽出することを試み、史料記述の性質に起因する不備を少しでも補つていくことにしたい。

II 食糧騒動と通貨騒動の諸事例

以下に提示する一六七七年から一七三五年に至る諸騒動⁽⁴⁾の發生時期の全般を貫き、通貨制度上の問題が繰り返し現出し、それらは都市民衆の經濟生活に少なからず負の影響を与えていた。このため、しばしば食糧騒動と通貨騒動を明確に區別することは困難であり、場合によってはあまり意味がないことさえある。しかし、運動に参加した民衆の不満の中心が何處にあったのかという點に注目すれば、一六七七年、一六九五年、一七三二年、一七二四年、一七二五年、一七二八

年の運動を食糧騒動、一七〇三年、一七二五年、一七三一年、一七三三年、一七三五年の運動を通貨騒動と分類すること
も可能であろう。

一 一七世紀末の食糧騒動

アブド・アッラフマーン・パシヤ 'Abd al-Rahmān Basha の統治期の一六七七年（一〇八八年）、穀物価格が高騰した。*Zubda* によれば、一アルダッブ當たりの価格は、小麦 (*qamh*) で六キルシヤ (*qish*)、大麥 (*sha'ir*) で五キルシヤ、ソラマメ (*fat*) で四キルシヤとなった。⁽⁵⁾ この時、城塞下のルマイラ廣場のハサン・モスク Jamī' al-Sulān Hasan 近くの穀物取引所 (*ruḡ'a*) に於て掠奪、及び破壊行動が発生した。残念ながら行動主體に關する記述は存在しないが、彼らはさらにルマイラ廣場に鄰接するカラーマイダーン Qaramaydān の近くに在り、た別の穀物取引所も襲い、そこに火を放った。⁽⁶⁾

アリー・パシヤ 'Alī Basha の統治期に見られた食糧騒動の發生地點も、城塞・ルマイラ廣場・カラーマイダーンといった行政府とその周邊であつた。一六九四年八月三〇日（一〇六年一月九日）、ナイロメーターの計測値が一六ズイラーウの「満水」に到達しなかつたにもかかわらず、ナイル増水祭 (*Jahr al-Nil*) が催された。*Tuḥfa* の記事によれば、その二日後にはナイル水量の減少が始まり、ナイル・デルタのガルビーヤ Gharbiya とムスーフイーヤ Muntifiya の兩地方を除くあらゆるエジプト農村で冠水が完了されなかつた。⁽⁷⁾ こうしたナイルの増水不足は、投機的な動きから閑もなくカイロの穀物価格の上昇へと繋がつた。この價格變動のひとつの契機となつたのが、同年九月八日（二月三日）に起きたイエニチェリ軍團の實力者キュチュック・ムハンマド Kujuk Muhammad の暗殺事件であつた。これに先立って、彼は河岸の商業地區であるブーラークに於て小麦取引仲介業者たち (*samāsirat al-qamh*) に對し、一アルダッブ當たり六〇ニスフ以上の賣却を厳しく禁じる政策を實施してゐた。⁽⁸⁾ 價格統制政策の推進者であつたキュチュック・ムハンマドの突然の死は、

穀物價格の急騰を導くこととなったのである。

その後、小麦一アルダツプ當たりの價格がブーラークの相場で四キルシュに、ルマイラの穀物取引所では小麦が六キルシュ、大麥やソラマメが四キルシュへと跳ね上がった。⁽⁹⁾ 斯かる市況の繼續する中で、一六九五年八月二六日(二一〇七年一月二五日)、行政府の在った城塞を中心とする場に於て、都市の貧窮者たちを主體とする抗議行動が展開されることとなった。*Tufja* の著者であるマッラワーニーは次のように記している。

カイロのあらゆる乞食と貧民の男や女や子供 (*jami' al-shahbadin wal-fuqarā' al-lahī bi-Miṣr jin riḥal wa-nisā' wa-subḥān*) が集まり、城塞 (*qaṣ'a*) に上って行った。彼らは總督府の中庭 (*ḥawsh al-Diwān*) で抗議し、全員で「我らが主人ワズィールよ、我々は物價高の激しさから飢えてゐるのだ」と叫んだ。けれども、誰も返答しなかった。で、貧民たちは石を手にすると總督府内にいた者に對して投石を行なつた。そこで、總督 (*walī*) は貧民たちを殴打すると追ひ出してしまった。このため、彼らはルマイラ廣場へ下り、そこにあつたすべての倉庫 (*ḥawṣā'il*) から小麦、大麥、ソラマメなどを掠奪した。また、彼らは小麦の卸賣商業施設 (*wirālat al-qanīḥ*) と大麥やソラマメで満ち溢れた總督補佐の倉庫 (*ḥāsil karkhūdā al-baḥā*) から掠奪を行なつた。⁽¹⁰⁾

さらに *Tufja* の記事は、この掠奪を機にあらゆる食糧價格が一段と上昇し、一六九六年二月(二一〇七年七月)にはついに一アルダツプ當たり小麦が六〇〇ニスフ、大麥が三六〇ニスフ、ソラマメが四五〇ニスフ、そして米 (*ḥiṣṣ*) が八〇〇ニスフといった異常な高値を記録し、レンズマメ (*lad*) が購入不能となつたことを傳えている。カイロの道やスークには上エジプトのバフナサー *Bahnāsā* やファイユーム *Fayyūm* をはじめとした地方からの流入者が溢れ、農村部を含めた廣域で多數の餓死者が発生する危機的状況となつた。⁽¹¹⁾ マッラワーニーは、こうした危機を「ファアティマ朝時代 (*aman al-Fawā'im*) 以外には同様のものを聞いたことがない物價高と死」と表現している。⁽¹²⁾ 飢えの厳しさから人々はスイカの種を食し、さらには食人肉も廣まつた。地方に於ても、例えばファイユームの町 *madīnat al-Fayyūm* で子供が捨てられ、

或いは賣られるといった事態が見られた。また、カイロでは貧民 (fugarā) が「スークから、パン製造業者 (ḥabbāzin) の頭上から、そしてパン焼き竈 (aṭṭan) から」パンを掠奪したため、護衛者を二名雇わなければ、パン焼き竈で練り粉 (ajin) を焼くことができなかった。⁽¹³⁾

アリー・パシヤの後を繼いでエジプト總督となったイスマーイール・パシヤ Ismā'il Bāshā は、一六九五年一月七日 (二一〇七年二月二七日) に着任すると聞もなく、カイロの通りやスーク (shawārī Mīst wa-aswāq-ha) に於て布告を出し、貧民 (fugarā) や乞食 (shahīatin) にカラーマイダーンに来るよう命じた。翌日、膨大な数の貧民と乞食が集まると、總督はエジプトのベイたち (sanā'iq) やカイロの徴税請負人たち (mulazimin bi-Mīst) に對する彼らの割り當て (tawzi) を實施した。この割り當ては、受入者の地位 (maqām) と力 (qudra) に應じて行なわれ、總督も自身と「自己の政權の有力者たち (a'yān dawlat-hum)」に千人の乞食を割り當て、物價高が鎮靜化するまで朝夕にパンや料理を充分に分與した。また、續いて疫病 (waba' azim) が發生し、死亡者數が増大すると、總督は貧民たちや外來者たち (ghurabā) の大規模な埋葬事業をも組織した。⁽¹⁴⁾

二 一七〇三年、一七一五年、一七三三年の通貨騒動

カラ・ムハンマド・パシヤ Qarah Muhammad Bāshā の統治期の一七〇三年二月二〇日 (一一一四年一〇月三日) には、通貨換算率に不満を持つ人々の運動が見られた。ここでの主要な問題點は、「マカーシースと呼ばれる銀貨の流布であつた。⁽¹⁵⁾ *Tuḥfa* によれば、」⁽¹⁶⁾ 削られた、賈の銀貨 (al-fridda al-maḥṣūsa wal-zayifa) が廣く流通するようになり、公定銀貨 (diwānī) が見られなくなった。⁽¹⁷⁾ *Awḍāḥ* には、廣まった銀貨が「銅の、削られた銀貨 (al-fridda al-nuḥās wal-hatt)」公定銀貨が「刻印のある銀貨 (al-niṣf al-maḥṣūm)」とそれぞれ表現されている。こうした公定銀貨の不足と低品位・低重量銀貨の普及により、一カルブ (kalb) が四五から六〇〜七〇フィッダに、一リヤール (riyāl) が五五から八〇フィッダへと變

化した。⁽¹⁸⁾つまり、域内商業の主要通貨であり、總督府で鑄造されるニスフ銀貨の價值の急な低下が見られたのである。斯かる市場動向の中で、集結した「スークの人々 (ahl al-aswad)」はアズハル・モスクに入つて行き、自分たちの置かれた狀況に關し學者たち (‘uḍma’) に對して不平不満を訴えた。そして、總督の居所へ行くことを強く求められた學者たちは、シャイフ・アルアズハルのナシヤルティー Muhammad al-Nashari を先頭に總督府へ行き、抗議者たちの要求内容を傳達した。この時、「スークの人々」も同行したことを史料は傳えている。⁽¹⁹⁾

學者たちから市民の要求内容を告げられた總督は、會議 (divan hari) を開き、ベイたちや帝國諸軍團のアーガーたち (aghawāt al-bulukat) と協議した。その結果、新たな銀貨の鑄造が決定され、マカーシース銀貨の使用禁止令が市内に公布された。さらに、商品に關しても各品目について公定價格が發表され、イエニチェリ軍團のアーガーであつたアリー・アーガー ‘Alī Agha がムフタスイブ (muhtasib) や警察長官 (shahib al-shurṭa) や裁判長補佐 (naṣīb al-qāḍī) らと共にカイロ市内を騎行し、布告に従わない取引をしている者を見付け次第嚴罰に處した。⁽²⁰⁾

一七〇三年の騒動と似通つた性格を持つ運動は、ヒジュラ暦一四五年のメッカ巡禮團の出發後、つまり一七三三年五月に銀貨の價值が低下し、一フンドウクリーが二四〇ニスフとなつた際にも見られた。この時、「都市住民 (ahl al-balad)」は學者たち (‘ulamā’) へ不満を訴え、「臣民 (ra‘iyya)」が抗議行動を起こした。Awḍah には、

自分たちの置かれた状態について抗議行動を起こし、學者たちに不満を表明した者たち、彼らは絹織物業者たち (ḥarīrīn) と飾り紐業者たち (aqqādīn) であつた。それから彼らは、總督 (wazīr) に對する請願書 (‘ard) を起草し、シャイフ・[イ]ブラーヒーム・アルバスユニー [I]brahīm al-Basyūnī 及びシャイフ・シュブラーウィー ‘Abd Allāh al-Shubrāwī の幾人かの學生たちと共にそれを送つた。シャイフ・イブラーヒームはワズィールの所へ行く前に、ムハンマド・ベイ・カタミシヤ Muhammad Bayk Qatāmish の所へ向かつた。彼がアズハル監督官 (nāẓir al-jāmi’) であつたからであつた。

と記録されている。⁽²²⁾

請願書を通讀したカタミシユは、自分の側近 (kaykhiya) を附けて彼らを總督の所へと送り届けた。總督はこの抗議集團に對し、翌日にリドワン・ベイ Ridwān Bayk al-Darfardar の館に集まるよう命じた。翌朝になると、アズハル・モスクが「臣民 (ca'ya)」で埋め盡くされ、市内は騒亂状態となった。こうした事態に恐れをなしたベイたちの命令を受け、イエニチュエリのアーガーはマカーシース銀貨の廢止など通貨の安定を目的とした布告を市内に公表した。この布告により、「臣民は自分たちの街區 (mahallat) へと戻って行った」という。⁽²³⁾

アービディー・バシヤ 'Abidi Basha Qatīl Qayfāz Bayk al-Faqari の統治期に生起した通貨騒動は、上記二つの運動と幾分形態を異にしていた。一七一五年二月二八日 (一二八年一月二日)、カイロの政治的有力者たち (a'yān Mistr, ashab al-'adab wal-hal) は、マカーシース銀貨問題や金貨價值の引き下げについて合意に達し、全員揃って總督に自分たちの合意點を上申した。これを受け、總督は命令書 (farmān) を彼らに與えた。命令書は、金銀換算率の新たな設定、マカーシース銀貨の使用禁止、そして銀貨や銅貨の新鑄をその内容としていたが、午後の禮拜 ('asr) の後にカイロ市内でそれが布告されると晩には市民の經濟活動が行き詰まる結果となった。アフマド・シャラビーは、「その夜、貧民 (fugara) は飢えて過ごした」と記している。⁽²⁴⁾ そして、翌朝の運動について *Tuhfa* には、

火曜日の朝、民衆が蜂起し (qāmat al-'amma) アズハルの諸門 (abwab al-Azhar) と諸店舗 (dakarān) を閉めた。彼らは集結すると總督府へと向かった。⁽²⁵⁾

とある。

この時の民衆の行動について、*Awḍah* にはさらに詳しい記事がある。それによれば、民衆は、市内の中心部にあるカフキーイーン Kahkiyīn (カフキーイーン Ka'akiyīn) 通りでラバに騎乗していたアズハルのシャイフ・ムハンマド・シナン Muḥammad Shīnan を取り圍んで拉致し、そのまま總督府へと向かったという。彼らは總督に對し、布告は喜んで受

け入れられているが、マカーシース銀貨で表示されていた市場価格がディーワーニー（公定）銀貨表示となったため、諸價格を新たに公定する必要があるということを訴えた。これを受けて總督は、⁽²⁶⁾「ベイたち（saraiji）に價格設定に關する檢討を依頼した。ベイたちは財務長官（daftardar）のアブー・シャナブ Ibrahim Bayk Abu Shanab 邸で價格設定の作業を行なった後、答申書（gayima）を總督に提出した。總督はこれを受理すると、命令書（farman）を發布し、その後公定價格が市内に發表された。⁽²⁶⁾これに對して Tuifa には、民衆の要求内容が少し違つた形で傳えられている。それによれば、民衆は銅貨の廢止が貧民（fugara）に害を與えることから、當時流通していた銅貨（fulus al-yasad）での取引の繼續を求めていた。そして、總督がこの要求を受け入れ、以前どおりの取引を認める布告を出したため、スークが開かれるようになった⁽²⁷⁾。」

三 一七二二—一七二五年の食糧騒動

ムハンマド・ハシヤ Muhammad Basha al-Nishanji の統治期の一七二二年八月二〇日（一七三四年二月八日）、「臣民（ra'ya）」がマカーシース銀貨（al-fidra al-magasis）に關する抗議行動を起こした。總督府はマカーシース銀貨を廢止する政策の實施で對應したが、ナイルの不安定な水位の状態を原因として穀物價格が急騰した。小麦—アルダップの價格が一八〇ニスフに達した時、「臣民」は蜂起し、總督府へ向かう途上のベイたち（saraiji）を毆打した。この當時最も有力なベイであつたイスマーイル・ベイ Isma'il Bayk b. Iwaz は、膝に投石を受け、逃走した。「誰もなければ（もし逃げなければ）、彼は死んでいただろう」と *Awḍāh* には記されている。「臣民」はさらに總督府へと上つて行き、自分たちの窮狀について總督に不満を訴えた。この要求を受けてブーラク地區で公定價格が發表されたが、その後も「カイロのすべての穀物取引所（jami' al-tuqa' alati fil-balad）」で掠奪が見られた。*Awḍāh* にはやはり「その夜、人々（nas）は飢えて過ぎした⁽²⁸⁾」とある。

一七二四年一月二〇日（一七三七年三月三日）にも「臣民」は蜂起し、カイロのスーク (saṣāq al-Qāhira) から掠奪を働いた後、アズハル・モスク al-Jamī' al-Azhar を襲撃し、發砲した。これに續いて「臣民」は、ルマイラ廣場及び最有カベいのムハンマド・ベイ・チェルケス Muhammad Bayk Jarkas の館へ行き、アザブ軍及びチェルケスの一族郎黨 (Jama'a) と戦鬪に及び、「革命的狀況」が一瞬ではあるが現出した。結局敗走した「臣民」側は墓廟地區のカラーファに避難し、そこでアッラーに宥しを求め、チェルケスとそのグループに對する神罰を祈つて過ごした。また、これに呼應する形で、市内の様々なモスクの尖塔に於て、蜂起した臣民に對するアッラーの宥しとチェルケスへの神罰を求める祈願行為が市民の間に廣がった。こうした事態に直面したチェルケスは、裁判長に祈願の禁止を命じるように求め、帝國諸軍團の出勤を要請した。その後、チェルケスは會議を組織し、そこで決議された減稅策を總督に上申した。⁽²⁹⁾

その後、一七二五年一月一七日（一七三七年五月一日）、イエニチェリ軍の本據地であるムスタフフィザン（イエニチェリ）門に物價高騰についての不滿が記された總督に對する請願書 (arḍ rai) が届けられた。これを受けてイエニチェリのアーガーは、公定價格と銀貨の使用に關する内容の布告を出した。しかし、この布告の發表後に經濟狀態はさらに悪化し、商品不足が深刻となった。その後、再び市民 (nas) によるムスタフフィザン門への窮狀の訴えを受け、イエニチェリ軍團ではバーキール・アーガー Bakır Agha が新しいアーガーに任命された。⁽³⁰⁾

四 一七二八年、一七三一年、一七三五年の騒動

一七二八年九月一九日（一七四二年二月一四日）、新たに總督に任命されたバーキール・パシヤ Bakır Paṣhā がカイロに到着した。この時、「カイロの住民 (ahl al-Qāhira)」は、總督のために神に對する祈願 (du'ā) を行ない、壓政 (javar) と物價高騰 (ghulaw al-as'ar) について彼に對して不滿を訴えた (shakaw la-hu)。總督は手を舉げてこれに答え、人々 (nas) が喜んだという。しかし、この後で具體的な對應策が實施されたか否かについては、不明である。⁽³¹⁾

バーキール・パシヤはその後エジプト總督からジェッタの總督 (wali bi-Judda) となり、それから再びエジプト總督に任命された。そして、一七三五年三月九日 (一一四七年一〇月一四日)、スエズ經由でカイロに到着した際、彼は再び民衆の運動に直面しなければならなかった。Awadab の記述によれば、總督がナスル門 Bab al-Nasr まで來た時、「臣民 (ra'ya)」が彼に對して銀貨の「異常な取引状態 (tuhsh al-mu'amala)」に關する抗議行動を起こしたのである。その後、「臣民」は總督の對應策の實施を待っていたが、布告は發表されず、商品取引はさらに混亂したという。⁽³²⁾

一七三一年二月二日 (一一四四年六月二日)、バスラ總督 (wali bi-Basra) であったムハンマド・パシヤ Muhammad Basha al-Silahdar がエジプトの新總督としてカイロに到着した際にも、行進中の總督の面前で「臣民 (ra'ya)」が抗議し、取引 (mu'amala) と價格高騰について不平を訴えた。當時、一フンドククリー funduqlī が二〇〇ニスフ、一ズインジャルリー (zinjari)⁽³³⁾ が一六〇ニスフとなり、銀貨の價值が低落していたのである。突然の抗議行動に怯える總督に向かつて、「臣民」は煉瓦 (ṭub) を投げつけ、それは彼の大腿部に當った。翌日、學者たち (ʿulamāʾ)、バクリー家の者たち (Bakriya)、サイイドたち (saddat)、ナキーブ・アルアシュラーフ (naqib al-ashraf) としてハイたち (sanājiq) と軍 (askar) が總督府に召集された。總督は彼らに對して「お前たちは黙っているが、お前たちの町 (balad-kum) の状態はどうなのだ。」と尋ねた。彼らは「皆が我らの主人ワズィールをお待ちしておりました。」と返答した。これに對して總督は、「お前たちの町の規範 (qanun) を私は知らないから、我々に事情を説明し、學者たちの閒での規範について教えよ。」と語った。このため、彼らは公定銀貨での取引が規範であるが、現状ではマカースイス銀貨が廣く流通し、諸價格が騰貴していることを總督に報告したという。⁽³⁴⁾

III 運動の性格

一 行 動 主 體

前章で取り上げた諸事例に於ては、一六七七年の騒動を除けば、運動の主體が史料に明記されている。まず注目すべきは、一七二二年、一七二四年、一七三二年、一七三三年、一七三五年の事例に見られる「臣民 (*ra'ya*)」である。この語は「民衆」とも譯し得るが、同時にそれは、「牧人」である統治者との對比で被統治者を「家畜の群れ」に喩えた語でもある。⁽³⁵⁾ マムルーク朝時代の食糧騒動に關する年代記記事の中では、一七一五年の通貨騒動の行動主體と同様に、「民衆」が「普通の人々」を意味する *'amma* の語で表現されるのが通例であり、*ra'ya* の用例は見當たらぬ。オスマン帝國への編入以降のエジプト社會に於てこの語を頻用する傾向が見られたことは明らかであるが、オスマン朝時代の年代記作者の民衆に對する視點に前代との微妙な差異を読み取ることもまた可能であらう。

一七二二年、一七二五年、一七二七年、一七二八年の事例の「人々 (*nas*)」、一七二八年の騒動の主體である「カイロの人々 (*ahl al-Qāhira*)」、及び一七三三年の騒動の「都市住民 (*ahl al-balad*)」という表現は、カイロという都市に居住する複数の市民を漠然と指して用いられているといえよう。そして、一七〇三年の通貨騒動の行動主體である「スークの人々 (*ahl al-aswaq*)」は、常設店舗を中心とした市場で經濟活動を営む様々な商人たちや職人たちを意味する。また、一七三三年の通貨騒動の主體は「臣民」であったが、特にその先頭に立ったのは、絹織物業者と飾り紐業者であった。このため、一七〇三年と一七三三年の騒動については「生産者の運動」としての性格が濃厚であると言うこともできよう。これらに對し、飢饉時の騒動である一六九五年の事例の行動主體は、「カイロにいるあらゆる乞食と貧民の男や女や子供 (*ahī' al-shahbadin wal-fuqarā' alladhi bi-Miṣr min riḡal wa-nisā' wa-subyān*)」であった。それは、喜捨によつて生活を立てる「乞

食」を含む都市困窮者層の成人と未成年者の男女を意味する。都市社會内の經濟的下層に限定されていた點に於て、この場合の行動主體はその他の事例における行動主體と若干性格を異にしていると考えられる。⁽³⁶⁾

二 行動形態

前章で取り上げた食糧騒動と通貨騒動について、特に民衆の行動形態に着目すれば、それらをとりあえず次の①②③に分類することが可能である。すなわち、①パン製造所、スークなどの小賣り業者への襲撃、そこからの食糧の掠奪、②穀物取引所、倉庫など卸し段階での食糧の掠奪、襲撃、③城塞にある總督府、ムスタフフィザーン門、或いは總督、ベイ、アズハルの學者に對する不満表明・抗議・要求・攻撃である。

①は、生活を支える基本的食糧の不足を掠奪という手段によって補充しようとする行動類型であり、食糧の不足が顯著であった一六九五年の騒動がその代表例である。また、一七二四年には一連の運動の初期の段階に於てスークからの掠奪が實行されたが、その対象品目は不明である。この①の行動類型については、マムルーク朝統治下に於ても同様の事例が少なくないことを指摘しておきたい。⁽³⁷⁾

次に②について言えば、一六七七年の食糧騒動では、それが都市カイロ、延てはエジプトにおける穀物流通の一大センターとしての機能を果たしていた城塞下のルマイラ廣場で展開された。⁽³⁸⁾ また、この事例では、ルクアと呼ばれる穀物取引所への襲撃や掠奪にとどまらず、商業施設の破壊や放火という行動形態も觀察される。こうした例はマムルーク朝時代については確認されておらず、それらはオスマン朝時代の運動の激烈さを強く印象付けるものとなっている。

一七二二年の騒動の際にも「都市のすべての穀物取引所」⁽³⁹⁾で掠奪が行なわれたが、一六九五年の食糧騒動ではルマイラ廣場に在った穀物倉庫群や小麦専門の卸賣商業施設が襲撃対象とされ、小麦・大麦・ソラマメが奪われた。ただし、そこでの乞食と貧民による運動の展開過程に於て、投石や掠奪といった行動が選擇・實行される前にオスマン朝エジプト總督

に對する陳情が集團で行なわれていた點にも注意を拂う必要がある。當初、困窮者たちは總督に救貧策（或いは物價對策）の實施を求め、いわば「對話による問題の解決」を目指していたように見受けられる。こうした窮狀の訴えを無視し、投石に對して毆打で答える公權力の對應方法こそが、城塞下の穀物流通センターにおける破壊・放火・掠奪というその直後の行動の誘因を成していたと考えられるのである。

以上の②の類型は、マムルーク朝時代に於ては極めて稀な行動形態であり、年代記史料ではこれまで、スルターン・ムアイヤド・シャイフの統治期における「物價暴騰 (gatal, 'azim)」の際の一四一六年に一例確認されているのみである。⁽⁴⁰⁾

①や②は言うまでもなく食糧騒動の場合の行動類型であるが、③の行動類型は食糧騒動と通貨騒動の雙方に於て觀察される。そして、③は公權力に對し物價高騰や通貨危機への不満を訴え、改善策の實施を求める行動パターンであり、我々はその高い「意識性」を読み取るべきであろう。それが、公正な食糧價格、正常な食糧の取引狀態、適正な通貨換算率、通貨の高品位などを維持する責任の所在は公權力にある、という意識に基づく行動であつたからである。そして、③として一括された行動形態は、その攻撃や不満表明が向けられた人的對象に於てさらに大きく次の四つに分類することができる。すなわち、②オスマン朝エジプト總督、①ベイ、③イェニチェリ軍團、④アズハルの學者である。以下、それぞれについて考察を加えていきたい。

②に該當するのは、一六九五年、一七一五年、一七二二年、一七二八年、一七三二年、一七三五年の騒動である。これらの場合の要求行動は、一六九五年、一七一五年、一七二二年については總督府で實行され、それ以外については新總督の着任時の行進の際に行なわれている。行動形態の點で特に注目すべきは、一七三一年の騒動で煉瓦が投じられたこと、そして、一七二八年の騒動でドゥアー（神への直接的語りかけ）が行われたことである。前者についていえば、それは投石行動の延長線上に位置付けられよう。一六九五年の騒動でも總督府に於て礫が打たれたが、それらは價格についての不満や生活における憤りの單純な表出として理解されるべきではなく、中東地域の「古き傳統」に根ざした象徴的な制裁とい

う意味がそこに込められていたと捉えるべきであらう。⁽⁴¹⁾

唯一神を媒介とした表現形式ともいべき後者は、一七二四年のような食糧騒動に於てのみならず、民衆の支持・要求・抗議が表明される場合にマムルーク朝・オスマン朝兩時代を貫いて廣く觀察されるものである。⁽⁴²⁾ オスマン朝時代の例を挙げれば、ウマル・パシヤ Umar Basha の統治期（一六六四—一六六七年）にギルガ縣知事のムハンマド・ベイ Muḥammad Bayk 配下の集團による掠奪がカイロで頻發した際、抗議行動として、「人々 (Khalaq) はドゥアーをもつてアッラーに祈った (ibrahala)」という。⁽⁴³⁾ また、イスカンダル・パシヤ Iskandar Basha Jarkas の統治期（一五六八—一五七一年）に法學者たち (fuqaha) の一團が自らの經濟的基盤を脅かす總督への神罰を求めるドゥアーを行なった例が示すとおり、それは知識人と民衆の別なく實行される抗議形式であつた。⁽⁴⁴⁾

⑥の事例については、これまで確認されたのは一七二二年の騒動の毆打・投石、及び一七二四年の戦闘のみであり、④に比してその事例数の少ない點が注目される。そして、この時期に於て、エジプト政治の實質的主導權が總督よりもむしろベイたちの手中にあつた點に鑑みれば、⁽⁴⁵⁾ これは少々奇異な事とも言えよう。

その理由についてまだ結論を下すべき段階ではないが、以下の假説をとりあえず提起しておきたい。すなわち、當時の民衆は、總督とベイたちの雙方が一體となつてエジプトにおけるオスマン朝政權を構成していると捉えており、その組織の頂點にある總督に對策の實行を求めることが多かつたのではないか。これをマムルーク朝時代との類推に於て言えば、マムルーク朝の百人長のアミール (amir hi'a) に對する抗議行動が少なかつたように、ベイたちへの抗議行動が少なかつたと考えられる。つまり、百人長のアミールたちと似通つた性格を持ち、同様の層に位置付けられるベイたちにはな⁽⁴⁶⁾ く、マムルーク朝スルターンと同じくエジプトにおける支配組織の頂點にある總督に對し、直接的に抗議・要求すること⁽⁴⁷⁾ で問題の解決を圖るべきであるとする民衆の政治意識があつたのではないだろうか。

以上の假説は、當該時期についてベイ勢力の自立性・獨立性を過度に強調し、オスマン朝總督の政治的役割を過小に評

價するこれまでの見解に對する反駁に接續する可能性を持つてゐる。そして、この假説の傍證の一つは、ベイたちに對する攻撃が、イスマール・ベイとムハンマド・ベイ・チュルクスという現在までに確認されている最初期の二人のシャイフ・アルバラド (shaykh al-balad) たちの時代になつて見られるようになったという點であらう。⁽⁴⁸⁾つまり、ベイ権力のさらなる強大化に伴う統治機構の再編と個人のベイの政治的リーダーとしての明白な登場こそが、ベイに對する民衆の直接攻撃の發生する背景を生み出したように見えるのである。しかし、これ以上推論を重ねることは止め、ここでは次の點のみ確認しておきたい。すなわち、この時期の民衆意識に於ては物價高騰や通貨の混亂についての責任は、ベイたちよりもむしろ總督に求められることの方が多かつたということである。

◎の事例は一七二五年に見られる。この時期にイエニチュリ軍團の影響力が都市經濟のさらに深部へと浸透し、ムフタスィブに代わつてイエニチュリ軍團長であるアーガーが市場行政や都市經濟の統制に於て中心的役割を果たすようになり、民衆への布告の公表者であつたことを考慮すれば、これは當然豫想される行動形態である。マムルーク朝時代の食糧騒動で頻繁に見られたムフタスィブに對する抗議や攻撃と照應する性質を持つ行動であるとも言えよう。⁽⁵⁰⁾むしろここで着意すべきは、その場合に 'ard' または 'ard' gal と呼ばれる請願書が作成され、提出された點である。マムルーク朝時代に於て類例のないこの抗議の形式は、オスマン朝時代の民衆運動を明瞭に特徴付けるものであると言えよう。そして、こうしたオスマン朝による「請願書システム」の導入が、争點の明確化に寄與する一面を持つていたことは否定できないであらう。しかし、他方で我々は、前近代の中東に於てその徹底化の點で異彩を放つオスマン朝國家の「文書主義的性格」とオスマン朝時代以前から續くカイロにおける「直接對話の傳統」との間の異質性にも思い至らざるを得ない。また、正確な統計資料は望むべくもないが、明らかに識字率の低かつた當時の民衆の言語世界に於て、こうした形式の確立が知識人層を中心とした「文字を持つ人」の「媒介者」としての政治的役割の増大に貢獻した可能性は高い。⁽⁵¹⁾そして、やはりマムルーク朝時代の騒動に類例の見出されない◎の事例が登場した一因をこの「請願書システム」の導入に見ることも可能では

ないかと思われるのである。

④については、一七〇三年、一七三三年にその典型的な事例を見ることができよう。抗議主體であるスークの商人や職人は、總督府に對して要求を直接的に表明するのではなく、まずアズハルの學者たちやそのリーダーであるシャイフに不満を訴え、彼らの仲介行動を促そうとした。政治権力と密接な關係にある知識人層を運動に巻き込むことによって要求實現の可能性を高めようとするこうした運動の方法は、一見する限りでは當然のことにように思われるであらう。しかしながら、マムルーク朝時代の騒動には類例が見出されていないという點がここで強く想起されるべきである。

カイロ社會におけるアズハルという宗教・教育機關の政治的重要性がファアティマ朝、アイユーブ朝、マムルーク朝、オスマン朝の各時代に於て繼續する側面を持つことは明らかであるが、民衆の抗議や要求の「媒體」としてそれが瞭然と機能するようになるのは、一八世紀に入ってからのことである。また、一七一五年の「拉致事件」が明示するとおり、アズハルのシャイフが民衆運動の「指導」の擔い手としてではなく、まさに「媒介者」として騒動の場に登場させられ、政治的機能を果たしたことに注意を拂っておきたい。

エジプトにおけるオスマン朝統治の文化的側面、換言すれば、オスマン朝エジプト總督府の文化的ヘゲモニー構造についての研究はまだ明らかに少ないと言えるが、上記の事例が強く喚起するとおり、統治構造におけるアズハルの位置付けをめぐる問題は、今後の重要課題のひとつである。そして、前稿に於て指摘したように、一七二四年の民衆によるアズハル襲撃もまた、文化的ヘゲモニー構造におけるアズハルの位置や機能の變化に伴って生じた事件であると解釋すべきであらう。⁽⁵²⁾この時に發砲が見られた點に我々は驚きを禁じ得ないのだが、既に一七〇九年という時點でシャイフ・アルアズハル選出の際に同モスク構内に於て戦闘や發砲が激しく繰り廣げられたことを踏まえれば、それをあながち特異な事件とも言えない面があるのである。⁽⁵³⁾一八世紀のアズハルは、既に統治構造における最も強い緊張を孕んだ結節點のひとつとなりつつあったように見えるのである。

IV おわりに

都市民衆の行動形態のみに限定して展開された以上の試論的考察からでも、この時期の民衆運動の持つ特質が幾つか明らかになったように思われる。特に重要であると考えられる問題点を最後にもう一度確認するならば、まず第一には、オスマン朝政権による「請願書システム」の導入に伴う民衆運動の表現方法上の變化であり、もうひとつは、民衆と公權力の間に位置する「媒體」としてのアズハル・モスク並びにそこで活動する學者たちの政治的役割の増大という新しい現象である。そして、前者の問題に關する考察を深めていくためには請願書の内容分析が、後者の問題についてさらに論を進めるためには當該時期のアズハルに關する實態把握の徹底化がそれぞれ次の作業として必要であらう。

しかしながら、この時期に入って新たに登場した「文書」や「媒體」を介した斯かる抗議や要求のあり方をのみ重要視すべきではないとも思われる。統治者との「直接對話」を目指す民衆の抗議・要求行動もまた繼續的に確認されたからである。いずれにせよ、本稿で取り上げた時期がカイロの民衆運動史上に於てひとつの大きな轉換期ないしは過渡期として位置付けられる、という見通しが開けてきたと言い得るのではないだろうか。

註

- (1) Raymond, A., "Quartiers et mouvements populaires au Caire au XVIII^{ème} siècle," Holt, P. M. ed, *Political and Social Change in Modern Egypt*, London, 1968, pp. 104-116.

(2) この時期の食糧騒動と通貨騒動に關する先行研究として、Raymond, "Quartiers et mouvements populaires," pp. 112-114; Baer, G., "Popular Revolt in Ottoman Cairo,"

Der Islam, vol. 54, 1977, p. 220, 223-224 が重要であるが、¹⁾これの經濟運元論的であり、行動形態に關する分析が不足している。²⁾ Raymond, A., *Artisans et commerçants au Caire au XVIII^{ème} siècle*, vol. 1, Damas, 1973, pp. 81-97 に騒動についで多くの敘述が見られるが、力點はこの時期の經濟危機・通貨危機の實態解明に置かれてゐる。

(3) Anon., *Zubdat Iktisār Ta'rikh Mulūk Miṣr al-*

民割り當て政策の実施例はマムルーク朝時代の一二七五年にも見られるが、その時もやはり飢饉対策であった。詳しくは拙稿「一四世紀末—一五世紀初頭カイロの食糧暴動」『史學雜誌』第九七編一〇號、二六—二七頁を参照。

- (15) この時期、ニスフ銀貨の品位低下が續いてゐた。そして、端が削られ、薄くなったニスフ銀貨はマカーヌースと呼ばれ、その流通の擴大が通貨危機の中心の問題であつた。詳しくは Raymond, *Artisans et commerçants*, pp. 35-36, 40-46 を参照。

- (16) *Tuhfa*, fol. 124a.

- (17) *Awḍāḥ*, p. 208. なお、*Awḍāḥ* は、この騒動を翌日のこととしてゐる。

- (18) *Tuhfa*, fol. 124a. *kalb* と書かれたオスマン銀貨と *riyal* と書かれたスベイン銀貨に關しては Raymond, *Artisans et commerçants*, pp. 20-23 を参照。

- (19) *Tuhfa*, fol. 124a; *Awḍāḥ*, p. 208. トーリス派に屬したナンヤンチーの經歷として *Jabarti*, '*Ajāzib al-Aḥḥar fil-Tarā'īm wal-Akḥḥar*, al-Qāhira (三六) '*Ajāzib* と書記, I, p. 70 を参照。

- (20) *Tuhfa*, fol. 124b; *Awḍāḥ*, p. 208.

- (21) *funduḡlī* 金貨として、Raymond, *Artisans et commerçants*, pp. 30—32 を参照。

- (22) *Awḍāḥ*, p. 584. 記事中のナントーンバーダ、總監シヤフ・アルマズン・カハル (*mashyakhat al-Azhar*) とあるのは、シヤフイー一派に屬する彼が就任するから、同職はトーン

カハルの學者たちによって占められていた (*Ajāzib*, I, pp. 208-209)。

- (23) 同上、*Awḍāḥ*, p. 584.

- (24) *Awḍāḥ*, p. 286.

- (25) *Tuhfa*, fol. 166b.

- (26) *Awḍāḥ*, pp. 286-287.

- (27) *Tuhfa*, fol. 166b.

- (28) *Awḍāḥ*, pp. 347-348.

- (29) *Awḍāḥ*, pp. 433-435, 438-440. この蜂起の詳細については、拙稿「尖塔の上のタッラーカイロの民衆蜂起・一七二四年—一月」『イスラム世界』第四二號、一九九三年、五〇—五七頁を参照。

- (30) *Awḍāḥ*, pp. 440-441. この後、一七二七年の夏にも、増水期にナイルの水位が八日間上昇せず停止したままであったため、人々 (*nās*) が騒動を起した (*dajja*)。一マルマフ當たり四〇ニスフであつた小麦價格は九〇ニスフに急騰したが、その後「滴水」となり、事態は收拾に向かつて (*Awḍāḥ*, p. 507)。

- (31) *Awḍāḥ*, p. 536.

- (32) *Awḍāḥ*, pp. 594-595.

- (33) *zinqūlī* 金貨として、Raymond, *Artisans et commerçants*, p. 30 を参照。

- (34) *Awḍāḥ*, p. 576.

- (35) Gibb, H. A. R. & Bowen, H., *Islamic Society and the West*, vol. I part I, p. 237.

- (36) この他、一六九二年にメクレンタ遠征から帰還した Ibrahim Bayk Abu Shanab に對しては食の集團行動が見られた (*Awqaf*, p. 188)。
- (37) 拙稿「カイロの食糧暴動」二、一八頁。
- (38) カイロを中心とした穀物の流通構造とルメイラ廣場の機能に關しては、Raymond, *Artisans et commerçants*, pp. 307-309 を参照。
- (39) *wikālat al-qamh* はルメイラの *ruq'at al-qamh* の西側に在った (Raymond, *Artisans et commerçants*, Carte 3, n. 227)。
- (40) 拙稿「カイロの食糧暴動」二二—二三頁。
- (41) 三浦徹「街區と民衆反亂——一五—一六世紀のダマスカス」『世界史への問い 四 社會的結合』岩波書店、一九八九年、九四—九五頁、拙稿「カイロの食糧暴動」二五頁。
- (42) マムルーク朝時代の例については、拙稿「イスラーム都市の食糧騒動—マムルーク朝時代カイロの場合」『歴史學研究』第六一二號、一九九〇年、二六—二七頁を参照。
- (43) *Tuhfa*, fol. 103b.
- (44) *Tuhfa*, fol. 86b.
- (45) Holt, P. M., "The Pattern of Egyptian Political History from 1517 to 1798," id. ed., *Political and Social Change in Modern Egypt*, London, 1968, pp. 82-87.
- (46) Holt, *Studies in the History of the Near East*, pp. 185-186.
- (47) 拙稿「イスラーム都市」二五—二六頁を比較参照せよ。
- (48) 兩者の同職就任のことが *Awqaf*, pp. 368-369, 399 を見よ。
- (49) Raymond, *Artisans et commerçants*, pp. 601-609.
- (50) 拙稿「イスラーム都市」二四—二五頁を参照。
- (51) 一八〇〇年の時點にエジプトを占領したフランス軍が「エジプトに對してのフランスの政治的・經濟的・社會的・文化的革命」(Cole, J. R. I., *Colonialism and Revolution in the Middle East*, Princeton, 1993, p. 114) だ。また「媒介者」としてこの時期のカプターの役割については el-Shayyal, G., "Some Aspects of Intellectual and Social Life in Eighteenth-century Egypt" in Holt, P. M. ed., *op. cit.*, pp. 122-123 に言及がある。また、シャイン・フルアベハルの權威の増大のことが Creelius, D., "The Emergence of the Shaykh al-Azhar as the Pre-eminent Religious Leader in Egypt," *Colloque international sur l'histoire du Caire*, Le Caire, 1969, pp. 109-123 を参照。
- (52) 拙稿「尖塔の上のシャレー」五四頁。
- (53) *Tuhfa*, fol. 130b-131a; *Awqaf*, pp. 220-222.

URBAN POPULAR MOVEMENTS RESULTING FROM ECONOMIC DISLOCATION IN OTTOMAN CAIRO

HASEBE Fumihiko

In this paper, I examine the nature of the popular protests caused by high priced and fiscal upheaval in Ottoman Cairo from the late seventeenth to the first half of the eighteenth century. To do this I draw on the Arabic chronicles, such as Mallawānī's *Tuḥfat al-Aḥbāb* as a source base to focus on the nature and activities of urban popular movements.

In addition to analyzing these seventeenth and eighteenth-century popular movements, I compare these with similar movements in Cairo during the Mamlūk period. From this comparison, two important matters are clarified. The first concerns the importance of Azhar's role as an intermediary between the Ottoman government and urban populations. The second concerns the emergence of petitions to the government as a new means of popular protest. Both of these developments affected the political climate of Cairo, and in them was revealed the desire of the people to directly express their discontent to the ruling regime. Although much of the nature and activities of popular protest movements in the Ottoman period were similar to those of the Mamlūk period, the Ottoman-period protests were more diversified and placed greater emphasis on the identification of a specific member of the ruling regime as a target of protest.